

2020年5月24日 礼拝説教要旨

詩編講解説教16 「摂理への信頼」

詩編16：1-11、使徒言行録2：24-28

第16編の背景にはイスラエルのカナン定住があると多くの聖書学者は述べています。エジプトを脱出したイスラエルの民が40年の荒野の旅を終えて神さまの約束の地であるカナンに入っていきます。4節の「血を注ぐ彼らの祭り」という表現はそのカナンに元々あった異教の祭りを思わせるものでありますし、6節の「測り縄は麗しい地を示し、わたしは輝かしい嗣業を受けました」という部分はカナンに入ったイスラエルの部族がそれぞれの土地を分配した出来事を彷彿させます。そのことを念頭にここは読む必要があります。

2節に注目してください。「主に申します。『あなたはわたしの主。あなたのほかにわたしの幸いはありません』」この言葉は言わば信仰告白のような言葉です。「あなたはわたしの主」と言います。さらに様々な幸いと呼ばれるものがある中で、そういうものを振り払い、「あなたのほかに幸いはない」とかたく決意していると理解することができます。また8節「わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし、わたしは揺らぐことはありません」これを原文に則して訳すところとなります。「わたしは常に我が正面に主を置く。主は右におられわたしは揺らぐことはない」真の神さまのみを信じ、神さまをわたしの正面に置くこと。めまぐるしく変化していく世の中だからこそ揺らぐことがないものを自分の中に据えることが重要ではないでしょうか。それが確かな信仰を持つことであり、信仰告白に生きることであります。例えば、このご時世、盛んに「新しい生活様式」ということが提唱され、人々は完全に新しい生活に振り回されています。オンラインと言われればオンラインに走り、9月入学と言えれば9月入学と、少し社会的に権威のある人たちがそう言うとすぐそちらになびきます。まるでこれがこれからのメインだと言わんばかりの勢いです。そこに一つの基準、正しさを求めようとします。そしてそれにそぐわないと正義感丸出しで人を断罪したり、批判したりするのです。非常に危うい世の中です。なぜこのように揺れ動くのでしょうか。その根底には信仰の問題があります。信仰が定まらないからです。

けれどもそのような中でわたしたちは明確に信仰を言い表します。「あなたのほかにわたしの幸いはありません」と。それは排他的で偏狭な生き方になるのでしょうか。そうではありません。それは生き方を狭めていくのではなく、むしろ将来に向かって切り開くものになります。それが最後のところで示されます。「わたしの心は喜び、魂は踊ります。からだは安心して憩います。あなたはわたしの魂を陰府に渡すことなく、あなたの慈しみに生きる者に墓穴を見させず、命の道を教えてください。わたしは御顔を仰いで満ち足り、喜び祝い、右の御手から永遠の喜びをいただきます」(9～11節) これは確かな信仰から来る果実と理解してよいでしょう。

さて、この点をもう少し深めていきましょう。5～6節「主はわたしに与えられた分、わたしの杯。主はわたしの運命を支える方。測り縄は麗しい地を示し、わたしは輝かしい嗣業を受けました」イスラエルの民はヨルダン川を渡って、約束の土地カナンに入ります。その話が旧約聖書のヨシュア記にあります。ヨシュア記を読みますと繰り返し出て来るのが今日の詩編にもありました「嗣業」という言葉です。これはイスラエルの人々にとっては、割り当てられた土地のことを意味します。それは自分たちで勝手に選ぶものではありません。早いものがちということでもありません。今日のところにありますように「測り縄」という縄を投げて、それぞれの土地が決められていきました。ヨシュア記をみると「くじ」によって土地が分けられたことが分かりま

す。このくじが測り縄とも言われます。イスラエルの人々はそこに神さまの御心があると信じて、その土地を受けたのです。詩人は「測り縄は麗しい地を示し、わたしは輝かしい嗣業を受けました」（6節）と言います。以前の口語訳では「測りなわは、わたしのために好ましい所に落ちた」と訳します。それは自分で好ましいところを選んだのではありません。結果としてそこは自分に好ましい土地だったのです。たとえそれがどのような土地であったとしても。

人生の中で大きな試練に直面すると、自分の運命を嘆くということがあります。現在のウイルス禍は深刻な社会不安を生み出しています。また病気や愛する人の死など人生には大きな試練が起こります。その時になぜ自分だけがこういう不幸な目に遭うのかと嘆きます。試練に遭ったヨブが「わたしの生まれた日は消えうせよ」と自分の生まれた日を呪いました（ヨブ3:3）。そのように自分の人生そのものを呪い、なかったことにしたくなる思いに駆られます。また誰かのせいにするすることでその押し潰されそうな思いから逃れようとすることがあります。社会のせいに、親のせいにする。それは心理学的には未成熟な状態であり、幼稚化、後退化ということでしょうけれども、そうでもしないと人は自分を保つことができないのです。

しかし今日の御言葉はそういうわたしたちに驚くべきことを伝えます。「測り縄はわたしのために好ましいところに落ちた」と。たとえ困難であっても、それはわたしにとって好ましいのだと。それはその困難の先に神さまの嗣業、分け前を見ているからです。わたしたちにとっての嗣業はキリストによって与えられた神の国、神さまの恵みの御支配に入れられることです。それがわたしたちの嗣業であり取り分です。どんな困難に遭ってもそれは変わることはありません。その嗣業に向かって測り縄は今のところに落ちたのです。

カトリックのシスター渡辺和子さんの著書『置かれた場所で咲きなさい』を思い出しました。この本はベストセラーになりました。渡辺さんは2016年に亡くなりましたが、多くの人々に良い感化を与えた一人のキリスト者です。この本の最初のところで「人はどんな場所でも幸せを見つけることができる」と渡辺さんは書いています。36歳の若さで岡山にありますがノートルダム清心女子大学の学長になられ大変苦勞されたそうですが、その時に宣教師からいただいた言葉がこの「置かれた場所で咲きなさい」という言葉だったそうです。その言葉は更にこのように続きます。「咲くということは、仕方がないと諦めることではありません。それは自分が笑顔で幸せに生き、周囲の人々も幸せにすることによって、神があなたをここにお植えになったのは間違いではなかったと、証明することです」

この「置かれた場所で咲く」ことと「測り縄が好ましいところに落ちた」というのは通じることだと思います。その置かれた場所、環境を神さまがお与えになられた場所と信じて、自らの生き方を通してそれを確かなことにしていくのです。でもそれは自分の力でそうしていくというよりも、その先の嗣業、救いの約束を見て生きるときに、そのように導かれ、整えられていくのではないのでしょうか。だから現状を嘆くのではなく、また人のせいにするのでもなく、変わらない神さまの救いを望み見て生きよと神さまは言われます。それが神さまの摂理を信じるということです。この摂理への信頼がわたしたちの歩みを揺るぎないものといえます。